日本NGO連携無償資金協力申請書

震災弱者の回復と地域復興のためのチャングナラヤン村ラーニングセンター改修
 特定非営利活動法人 ICA 文化事業協会 (ICA Japan)

2. 事業の目的と概要	
(1) 上位目標	地震の影響で亀裂したラーニングセンター（ICAが2002年度日本NGO連携無償資金協力事業で建設）の修復により、被災者の回復と復興活動を遂行する。
(2) 事業の必要性（背景）	<p>ア. ネパール連邦民主共和国の概要 ネパール連邦民主共和国（以下ネパール）は、2014年の人間開発指標によると187ヶ国中157位の貧困国であり、以前より農村部における貧困、食糧不足、劣悪な保健衛生環境、道路などを含む輸送インフラ整備等が問題になっていたが、2015年4月25日の大地震により状況はさらに悪化した。</p> <p>イ. 大地震によるネパール全体の被災状況 2015年4月25日に首都カトマンズの北西約77kmを震源としてマグニチュード7.8の地震が発生。次いで4月26日にはマグニチュード6.8、5月12日にはマグニチュード7.3の余震が続発した。7月9日のネパールの英字新聞によると、死者9,000人以上、負傷者25,952人。約470,991戸の家屋が全壊、世界遺産である寺院、道路にも多大な被害が及んだ。5000校以上の学校が崩壊するなどの被害を被っている。ネパール政府は物資配布、復興支援を行なっているが、被害の甚大さと地理的な難しさから、支援が届いていない場所も多くあり、75郡の地方行政区分のうち、特に大きかったのが事業地のバクタプール郡や、シンドウパルチョーク郡、ゴルカ郡、ヌワコット郡、ダディン郡、カトマンズ郡等の14郡である（Government of Nepal Disaster Risk Reduction Portalより）。</p> <p>ウ. 事業地（バクタプール郡、チャングナラヤン村）の被災状況 バクタプール郡はカトマンズから12km東に位置し、人口約7万8000人の都市である。ここはICA文化事業協会（以下ICAジャパン）が、2002年度に外務省の日本NGO連携無償資金協力事業として行った「女性と子供のためのラーニングセンターの建設」の建設地であり、今回の地震で9割が崩壊したユネスコ世界遺産のチャングナラヤン寺院もある、最も被害の大きな地域の1つである。この寺院から1km以内の場所に貧困層が住んでいるチャングナラヤン村がある。地震の被害状況は、5,792世帯（人口31,034人、2011年国家統計）の内、全壊家屋が4,170戸、半壊1,030戸、1部損壊592戸、死者は15名、負傷者数は77名に達しており、家畜の死亡被害も多数報告されている。低いカーストの人々は土地を持たず、収入は畜産に頼っているため、財産である家畜の死亡は収入源が断たれることを意味する。</p> <p>エ. 「子供と女性のためのラーニングセンター」と事業対象者の被災状況 （ア）「子供と女性のためのラーニングセンター」（以下ラーニングセンター） 2002年度に外務省の日本NGO連携無償資金協力でICAジャパンが建設したラーニングセンターは、過去13年間、現地提携団体であるICAネパールと、地域住民（Progressive Women Group）（以後：進歩的女性グループと呼ぶ）により運営され、手作り手芸品販売、識字教育、マイクロクレジット事業、住民の健康診断、環境保全、</p>

HIV/ AIDS 予防、持続可能な農業、などが実施され、モデルセンターとして貧困層の生活水準向上に役立ってきた。ラーニングセンターを運営してきた進歩的女性グループは共同組合を作り、当初 20 名でスタートした活動が、現在では 800 人に拡大されている。震災以前は大学生も活動に参加して、地域住民との交流が広がっていた。しかし今回の地震により、センターの天井、壁、外壁などに大きな亀裂が生じた。特に最上階の寝室部分や屋上の台は、日本 NGO 連携無償資金協力での完成後に、チャングナラヤンのローカル住民と ICA ネパールにより、参加者が宿泊研修できる場所や水タンクを設置する場所として増築されたが、地震により不安定な状態になっており、再度の地震では地上に落ちる可能性もある（別紙参照：ラーニングセンターの概要と被災状況）。

進歩的女性グループにより建物全体の管理が行き届いていたため崩壊は免れたが、センターでの活動は停止している。これを早急に修復し、被災者の中でも特に子供、高齢者、貧困女性のケアを中心に震災復興支援の活動拠点として利用する考えである。そのためセンターの修復は急を要する。

（イ）子供たち

国際医療隊（International Medical Corps）は、5 月 12 日に発生した大きな余震が、心的外傷後ストレス障害（PTSD）を発症する危険性を一気に高めたと報告している。チャングナラヤン村の女性リーダーによると、7 月現在崩壊を免れた学校は授業を再開しているが、地震後、子供たちの多くは苦痛にも似た表情を示すようになった。大切な人、家、ペットなどを奪われた悲しみや寂しさ等、精神面で深く傷ついているとのことである。夜泣き、夜尿、悪夢などを見る子供もおりストレス症状がみられる。現在は子どもの遊び場もなく、彼らは瓦礫の上で遊ぶという危険な環境に置かれている。さらに長期に渡るテント生活、栄養バランスの欠如、安全な飲料水の不足、衛生環境の悪化等で物理的、心理的な影響がストレスとなっているとみられる。

（ウ）高齢者

ネパールは 60 歳以上の高齢者が人口の約 8.1% を占め、伝統的な家族制度が崩れ、都市部では核家族化が進み、一人暮らしの高齢者が増加してきている。震災で最も影響を受けたのは、高齢者、子供、障害者である。農村部の人々は、農業だけで生計を立ててきたが、震災で全てを失い、生きがいを喪失している。高齢者の中には、健康面、経済面、社会面、心理面の問題を抱えている人々が多い。地震後の高齢者は家族との対話、栄養食、幸福を感じるリラックスした環境が失われ、また外に出て自分の悩みを打ち明け、相談するといった場所もないため、孤立した環境の中で悲しみと恐怖と無力感、ストレスを強く感じながら過ごしている。そこで高齢者クラブをつくって、助け合いや対話ができる環境が必要になっている。

（エ）貧困女性

ネパールの農村部の女性は、2011 年時点で女子 44.5%、男子 71.6%と識字率が低い。これは、農業に忙しく学校に行けないという理由の他、女性の月経は不浄であるというネパールの伝統的な考え方があり、月経期間中（年に 60 日間）少女が学校に行けず途中退学の原因になる、生理用品に関する知識がすくない、学校のトイレが不便である等が起因している。（杉野美礼（2013）ネパール村

	<p>落部における学校生徒への生殖教育活動, 四国大学紀要、(B) 36, p25-31)。この問題を解決しようと、2012年にチャングナラヤンの進歩的女性グループは現地 NGO (Beyond Nepal、ネパール社会福祉協議会提携団体、2010年設立) より布ナプキン製造の訓練を受けてきた。布ナプキンの手入れ(太陽の下で洗浄し、乾燥させる)は時間がかかり、衛生的にも問題がある。また、ラーニングセンターでは、主に観光客向けの手芸品を作ってきたが、ラーニングセンターのさらなる発展のために、女性達自身のための製品作りの必要性を感じており、ネパールで市販されているものは高価だが女性からの要望が強い、使い捨てナプキンの制作を行う。</p> <p>オ. 現地行政との連携 バクタプール郡行政事務所には事業内容等の説明を行い、本事業実施に対する許可と協力を得ている(要望書 Bhaktapur District Development Committee)。</p>
<p>(3) 事業内容</p>	<p><u>1-a ラーニングセンターの修復</u> 13年前に日本政府の支援によって建てられたラーニングセンターは、地元の人々により管理をしていたにもかかわらず、今回の地震で亀裂が生じた。地震で亡くなった犠牲者の多くは、壁が崩壊してその下敷きになったと言われている。ラーニングセンターにおいても、柱や梁など建物の基礎は問題ないが、壁のひび割れはひどく、今後の余震で壁が崩壊する可能性があるため、貯水タンク置き場の撤去、建物の壁、宿泊施設の壁や天井全体を建て替える必要がある。地震以前壁はレンガ、砂、セメントを固めて作られていたが、修復作業で壁にも耐震強化のサポートをして、将来の地震に耐えられるようにする。修復箇所は、会議ホールの壁、短絡壁、妻側壁(三角部分)、横部屋、横部屋天井、トイレブロック、トイレブロックの天井である。日本から免震のパイオニアとして免震構造の分野で活躍されている構造設計専門家(日本建築構造技術協会に所属する免震の専門家: 寺本隆幸氏) 1名を15日間派遣し、修理箇所を分析し、建設のアドバイスを行う。</p> <p><u>1-b. 復旧に向けた住民会議の開催</u> チャングナラヤン村の住民リーダー、ICA ネパール、村落開発委員会(Village Development Committee) 高齢者、進歩的女性グループのリーダーが集まり、復興に向けた会合を行う。地域のビジョン、地域の直面している問題点の把握、解決策の提案、実施計画等について話し合い、短期・中期・長期計画を作成し、バクタプール郡の地方自治体に提出する。ICA ジャパンのファシリテーターにより2回開催する。参加者は40名 x6日間 x2回</p> <p><u>2-a. 子供を対象とした精神面、感情面のケアの実施</u> 未だ余震が続く中、子供達の外傷後ストレス障害(Traumatic Stress Disorder)やトラウマへの対処方法として、①子供達に自然災害について説明する。②子供が感じる恐れや不安を認め、大人がそれを共有する。子供の感情表現ができるように助ける。(絵、ぬいぐるみで話しかける等) ③遊びを通して楽しさを味わう。④家族やグループで行動する。これらの観点から遊び場を提供する。さらにラーニングセンターに子供連れの母親が安心して研修できるようにするためにも、ラーニングセンターから50m以内の敷地内に簡易的なシーソー、ブランコ、バスケットコート等の遊具を設置し、災後の子供達の楽しい遊び場、母子の交流の場、憩いの場とする。毎日20人前後の子供達(幼児も含む)が学校帰りに楽しく遊ぶこと</p>

	<p>のできる環境を整える。</p> <p><u>2-b. 高齢者のためのケア</u></p> <p>60 歳以上の老人がチャングナラヤン村には 200 人存在する。地震の後、近隣の人々と話し合うこともなく、家で一人じっとしている老人が増え、うつ状態になるといった「生活不活発病（廃用症候群）」を引き起こしやすい。本事業では高齢者のためのクラブを作り、ラーニングセンターで、交流会の開催、運動、ゲームなどのレクリエーション活動の他、雑誌、新聞などを置いて、老人が集い本を読むことができるような環境を用意する。また仲間との共通の話題づくり、屋外での活動を促進するため家庭菜園も行う。毎週特別プログラムとして、瞑想、卓話、健康教育ワークショップを盛り込む。毎日 25 人～30 人がセンターに来訪し、彼らの孤独を和らげ、幸せや悲しみを共有できる場を見つける機会とする。</p> <p>1. <u>2-c. 被災した貧困女性による使い捨てナプキンの製造と販売</u></p> <p>地震で被災した貧しい家庭の女性 15 名～20 名に使い捨てナプキンの製造訓練を行う。1 台の機械で 1 日、1250 個のナプキン（原材料は、木材繊維と熱接合不織布（例えば、ポリエチレン）などで、ローカルの薬局で供給出来る。ラーニングセンターには 13 部屋あり、一部を資機材置き場としても利用する他、1 階の広いスペースを訓練作業場として利用する。訓練はチャングナラヤン村の女性でマイクロファイナンスを指導している Ms. Sarala と Ms. Devaka Shrestha が行う。彼女たちは、インドで使い捨てナプキンの製造している会社で直接に機械をつかったナプキン製造訓練を受けた。ネパールでその経験を生かして他のグループでも指導してきたことから、機械を使った製造と販売で、将来的には 100 人の女性に研修を行う。材料の調達、生産管理、販売等一連のビジネスを運営できるように販売研修も実施する。ナプキンの仕入れ値段は Rs. 2～4、市場販売価格は一個が Rs. 10 であるが、ICA としては Rs. 5～6 の半値で販売する予定。収益は材料費、デザイン、パッキング、人件費他、地域への利益還元を目的とする。将来的には地域の女性が 100%使い捨てナプキンを利用できるようにする。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ラーニングセンターが復活し、多くの人々が訪れることで、地域開発のモデルとしてこのセンターから学ぶことが出来る。また他の多くの村への波及効果が見込める。（例：貧困女性の収入増加、老人の生きがいを育てる活動、子供の健全な遊び場などの創造などコミュニティ活性化） ・センターの修復は、ネパール人と日本人との協力で行われる。修復後の管理は現地の女性グループによって運営がなされ、さらに日本との信頼の絆が長く人々の心に残る。 ・子供達がトラウマから解放され、のびのびと遊ぶことができるようになると、子を持つ母親は安心して仕事に打ち込み、コミュニティの問題解決に貢献することができる。 ・これまで社会から見過ごされていた高齢者、女性、子供が互いに助け合うことでバランスのとれた、持続的発展するコミュニティとなる。 ・少女の就学率の低さが解消されると、早婚、家畜の世話、育児、農業という典型的な農村女性の人生に可能性が生まれる。 ・被災地が震災後緊急支援を要した時期から復興期へと移行するなか、ラーニングセンターが活発化することで、住民の力が結集し復興に向けて動き出すことができる。 ・ナプキンの製造販売は雇用者賃金の支払い者は、地域の進歩的女

	<p>性グループ（責任者：Mrs. Devaka Shrestha）が行う。新たにナプキン製造販売チームを形成し、ナプキン製造技術指導はすでに訓練を受けている Seema Gautam、販売指導 Ram Pratap が担当する。連絡調整は地域に住む男性 Amulya Dhungel、女性：Devaka Shrestha を起用する。販売先はナプキンを知らない、不衛生な布や不適切なものを使っている少女や女性にまず利用の啓発を行い、販売をすすめる。</p> <p>・事業終了後は震災前からセンターの管理をしていた進歩的女性グループがそのまま事業を引き継ぎ、ナプキンの事業も Kathmandu, Bhaktapur, Banep などに販売先を広げることすでに彼女たちは視野にいられており、事業の継続が見込める。また現地の ICA ネパールも引き続き相談役として見守っていくことになっている。</p>
<p>（５）期待される成果と成果を測る指標</p>	<p>・ 1-a ラーニングセンターの復旧</p> <p>成果 1：ラーニングセンターは研修を受ける女性グループの子供たちの託児所としても利用できるようになっている。現在グループの 850 人のメンバーは本事業の直接裨益者に当たり、その 90% は女性である。村の人口 6000 人がこの事業を通して間接的な恩恵を受ける。</p> <p>指標：日本から構造建築専門家が行き、センターのひび割れの現状を分析し、現地の建設業者と共に修復計画を策定する。その計画に従い、修復を実施。</p> <p>・ 1-b 住民復興会議</p> <p>成果 1：被災地域では多くの問題が山積みされており、問題解決に向けて住民、ICA ネパール、地方自治体は何をなすべきかをお互いに意見交換し、解決に向けた活動を実施することができる。</p> <p>指標：話し合いの合意項目を文書として記録し、スタッフのモニタリングや評価時に進行状況判断が可能になる。</p> <p>・ 2-a 子供のケア</p> <p>成果 2：近隣の子供たち 400 人がラーニングセンターで遊んだり、カウンセリングを受ける。子供達が災害でショックを受けた子供の保護とケアを行う。子供のトラウマを軽減するため、近隣の子供達がラーニングセンターの中庭で遊べるように、遊具を設置する。安全確認のため監視人も置く。</p> <p>指標：子供を対象にメンタルケア専門家による診断とアンケート調査をおこなう。専門家の診断記録やスタッフの聞き取り調査。</p> <p>・ 2-b 高齢者のケア</p> <p>成果：地域にいる 60 歳以上の高齢者が 200 人のうち 120 名（60%）がカウンセリングを受ける。震災により健康・社会・経済面で問題を抱える高齢者を対象に、問題を共有するための高齢者クラブを作り、25～30 人程度が毎日ラーニングセンターで開催するプログラムに参加してもらい、コミュニケーションの機会とする。</p> <p>指標：高齢者を対象にメンタル専門家による定期的なアンケート調査を実施する。アンケート結果による精神状態の改善。</p> <p>・ 2-c 被災した貧困女性グループによるナプキンの製造と販売</p> <p>成果：被災者女性 15 名～20 名が品質管理、マーケティング、製作研修を受け、衛生的で質の高いナプキンを製作する。</p> <p>指標：生理ナプキン製作機械 2 台で 1 日約 2500 の生理ナプキンを生産する。15～20 人を直接雇用し、被災者の収入向上に役立てる。</p> <p>1 人前の製作者となるには約 3 ヶ月を要する。1 ヶ月間で 1000 人の女性にナプキンを販売する。1 個の仕入れ値段が Rs. 2～4 で 1 パック Rs. 5～6 で販売する（市場価格は Rs. 10）。収益は材料費、</p>

	<p>デザイン、パッキング、人件費などに支払われる。これにより地域の女性問題解決と地震後の被災者への生計手段及び収入確保が可能になる。</p>
--	---